三重大学教育学部研究紀要　第58巻　教育科学　(2007)　181 − 193頁

附属小学校における道徳授業に関する事例研究
― 道徳教育への「参与観察」の見地から ―

蓮　尾　直　美

A Case-Study on a Moral Education Class in the Belonging Elementary School ; A View Point of "Participant Observation" on Moral Education

Naomi HASUO

1．問題の設定

本稿では、附属小学校で自ら取り組んだ道徳授業までの経過を「参与観察」の過程とみなして、社会学の立場から事例的に考察を加える。これによって、教員養成を担う学部の教員である筆者による附属学校での授業が、自らの学部教育の基礎をなす研究の展開にとって、きわめて貴重な意味を有するものになると考えられる。

そこで、附属学校との協働プロジェクト(1)「教育実習指導のあり方」研究の一環として学部教員の試みる授業実施企画を契機に、筆者は道徳教育に関する社会学の理論構成をめざすことにした。このことは、また、教育実習場面のみならず教育現場におけるカリキュラム開発への基盤を提供しうるものと期待できる。というのも、現行の教育実習指導において、実習生の多数は道徳授業を実習科目として選択してはいない背景がある(2)。この点は、全国的にみても同様に、どちらかといえば"敬遠"されてきた傾向のある、授業科目といえるかもしれない。ちなみに、学部学生たちの小・中学校時代の、ある道徳授業での担任教師たちは、生徒たちにVTRを見せて授業をやり過ごしていたこと、道徳の授業にもかかわらず実際はレクリェーションの時間だったという。

ところで、わが国の道徳教育は、戦後から今日に至るまで教育現場では必ずしも正当に位置づけられてこなかった。このため、その矛盾が、昨今の子供や若者たちの姿ないし言動に映し出されているものといわねばならない。

このような状況下にある教育現場の背景には、わが国の戦後教育施策をはじめ60有余年を経て醸成された「道徳教育」にまつわる固有のイメージが、われわれ国民をはじめ学校教育を覆い尽くしてきた消極的側面は否定できない。周知のとおり、わが国における子供たちや若者の現状をみるとき、学校教育の無力さを痛感せざるをえない。昨今多発する(3)、いじめに端を発する子供の自殺問題など深刻な事件は、この問題は、ひとり若者や子供の問題であるのみならず、モラル崩壊の進む大人集団や社会のあり方こそが問われている課題といえる。すなわち、戦後60年余をかけて形づくられてきた、大人つまり多くの保護者をはじめ教師たちにとっての「道徳」イメージは、「道徳」が実生活に結び着かない実現可能性の薄い理想を子供に一方的に教え込む、「徳目」主義ないし教条主義であり、この固定的イメージが各自の内面に深く浸透し受け止められてきたと考えられる。

このために、多くの大人は「道徳」を自ら教えることに躊躇し、わが子のしつけや「道徳教育」に消極的ないし否定的な反応を示した。また、ある大人は、自らの実際の言動や姿に気づかないまま、ことば次元での「理想」によって子供からの反発を受けるものもみられる。また、理想と現実を意識無意識

に使い分ける、類の大人の姿は、これを観察する子供によって、その使い分け方、すなわち自己合理化の価値がそのまま模倣の対象となり、これを土台に子供たちは、結果的に学校・学級社会で教師や同輩の生徒たちから「潜在的カリキュラム」[4] を学習するものといえるだろう。

このように今日喫緊の課題であるにもかかわらず、必ずしも正面から取り上げられることのなかった道徳授業についての問題意識に基づき、義務教育を中心とする教育現場に、より質の高い教師を送り届けなければならない立場から、解釈的社会学の方法としての「参与観察」を通して考察を加えることにした。

2．研究の視点と枠組み

道徳は、子供たちが生涯を歩む道標として、具体的な形の「徳目」を身近な大人から教えられる必要がある。それは、子供たちの内面に眠れる「徳性」があるとしても、これを呼び起こす働きかけ、つまり道徳を「教える」ことは、仏の社会学者デュルケムも指摘するように、生物学的存在として誕生した子供は社会的には白紙の状態なので、やがて「社会（学）的存在」を内面に現出させるように、より成熟した世代から方法的に社会化され「一人前」の社会人となるためのトレーニングを受けることが求められるからである。

E.デュルケムは、20 世紀初頭、三度の教育改革を経験し一層個人主義化していく第三期共和制の仏国内で、旧来支配的だった宗教的道徳に代わる新たな道徳、すなわち事実として社会に存在する「世俗的道徳」が、国民にとっての望ましい価値ないし規範であることを明示しようとした[5]。

この仏国では、当時、自殺者の多発した時代状況がわが国と類似して、規範意識の混迷が認められた。わが国の学校生徒のいじめによる自殺者が続出する現状において、個々人に求められるものは、規範意識というよりも「規律の精神」の喚起であり、このためには、各々が所属する共同体への帰属意識や愛着心の醸成が必須となる。その際、集団内の紐帯が基盤をなすものであるから、この紐帯をいかに築くかは、まずもって初等学校における道徳教育の質が鍵となるものと E. デュルケムは指摘する。われわれが道徳を学ぶ前提には、単なる個々人の利害を越えた共同体に所属することの意味や、共同体としての紐帯を基盤にその共同体への一体感情が醸成され、そこで生活する上での規則や暗黙のルールを守ること、すなわち「規律の精神」が深く関わっている。

ところが、この世に初めて生を受けた子供にとっては、それらの約束事や価値規範をなぜ遵守しなければならないのか、その理由を生得的に理解できるはずはない。デュルケムは、この故に、子供の中に道徳律を現出させる教育の外在的役割があると指摘するのである。

すでにみてきたように、道徳的行為の目的とみなされる社会は、個人的利益の水準をはるかに越えた実在である。他方、われわれが何物にも増して愛情を寄せ、自己を愛着せしめるべきは、社会の組織ではなく、社会の魂であるとデュルケムはみる。ここでの社会の魂とは、理念の総体、それも個人の心的能力をはるかに越えて単なる一個人によっては決して理解されることなく、また、もっぱら結合された複数個人の力によってのみ形成され、生命を維持していくところの理念の総体とみなされる。本質からして理想主義的でありながらも、他方で、固有の現実性をも失わない道徳がわれわれに提示しようとする理想は、決して、時間と空間を越えて存在するものではない。その理想は、あくまでも現実につながり、現実の一部をなすものであって、いわば、われわれがこの眼で見たり、この手で触れたりすることができ、現にわれわれ自身がその生命に関与しているところの、具体的で血の通った生き物である社会にたいして精気を吹き込むものと受け止められる。ここでの道徳のもつ理想性とは、無為な空理空論に堕するものではないという。なぜなら、この理想は、思惟がひとり暢気にかまえる、内的な事物ではなく、われわれの喜怒哀楽やわれわれが欲するごとくわれわれを必要とするからである。

実際、この観点からすれば、児童を道徳的に形成する方法は、あらゆる時代とあらゆる国について妥当する、きわめて一般的な道徳的格言の数々を児童に向かって繰り返すことでは決してない。子供たちに自分の国と自分の時代を理解させ、自分の国や時代が要求するものを感じ取らせ、人生の生き方を教え、やがて彼を待ち受けているはずの集合的作業に備えて、これに立派に仲間入りできるよう怠りなく準備してやることこそ、両親や学校の教師が児童にたいして為すべき道徳教育の方法といえる。すなわち、教育の内容や方法には、心理学次元では必ずしも解明できない、社会的・公共的性質がすでに内包されているからである。

このように具体的に存在する道徳をありのままの姿で観察する社会学の接近手法は、これまで道徳的実在を先験的に決定するのではなく既成事実の尊重に偏し、実践の面で無力、かつ理想に対するいかなる視野も開かせないとする非難をしばしば受けてきた。否むしろ、われわれの居住する社会的世界が、実際に存在し共有する価値や規範をして「世俗的道徳」の根拠とみなしうる基盤を提供することができるだろう。

今日、教育基本法の改正によって[6]、あらためて地域社会や家族の紐帯、ひいては「国を愛する心」の醸成をめざして、道徳教育の重要性に力点を移してきたように見える。ところが、実際の教育現場では、既述のように教師の多くは、道徳教育に懐疑的な受け止め方をしているといわねばならない。

このため、教育現場として限定的ではあるが、可能な限り参与し児童や生徒に直接に関わって授業を試みる「参与観察」の手順を踏むことがきわめて有効であると考えられる。

3．研究の方法

本研究では、附属小学校での道徳授業実施までの経過を含む全過程を「参与観察」の場面とみなした。この手法において、参与観察者は単なる外部者ではなく、あくまでも内部者としての見地から研究対象に接近して内在的・解釈的な把握に努める方法的手順を採ることが求められる。すなわち、観察対象としての学級社会に一定期間断続的ではあれ参与して、学級社会を相互行為の次元で全体として理解する必要がある。その際に、内部者としての担任教師の保持する学級経営方針[7] を理解しつつ、観察者による授業は、あくまでも当該学級の経営に即して児童に資する仕方で試みられることが、「参与観察」上必須不可欠の要件ということができる。

(1) 参与観察の対象と手順

本学部附属小学校第六学年学級での道徳授業を試みるに際し、この授業実施の日時と教材内容の決定にあたり、既述の通り担任教師[8]の意向を勘案して組み立てた。その際、参与観察者は、授業実施に向け、担任教師による算数、理科の授業をはじめ学級児童の学習活動を見学した。この他に、平成17年11月に開催される予定の附属中学校主催の文化祭に出演する児童たちの合唱練習にも見学参加した。さらに、同月28日に試みられた本学部教員の新田氏[9]による授業見学の機会にも恵まれた。これら参与観察に関わる一連の営為は、当該学級授業への参与者にとって学級社会内の児童理解のために何よりも肝要なことだったからである。

(2) 参与観察としての授業実施とこれにいたるまでの学級理解

第六学年・学級での道徳授業は、当初平成17年11月末から12月初旬に設定していた。ところが、参与観察者は、11月19日に実施された本学部推薦入試の終了後の夕刻、学部構内で不覚にも負傷した。このために、予定の授業実施期日は、延期されて翌平成18年2月9日及び2月23日の2回にわたり設

定することとなった。

次に、道徳授業実施に先立ち平成17年9月末、学級担任Y教師の配慮により、児童たちが書き記した6学年新学期当初以降の学級生活に関する作文を手がかりに、当該学級社会の状況について、以下概観していくことにする[10]。

＊＊

（女子児童F1.）

4月7日木曜日。ついに「6－○」が始まる日がやってきた。荷物を持って、5－○の教室から6－○の教室へと移った。そして、出席ばんごう順のとおりにロッカーにランドセルを置き、椅子にすわった。黒板の前には、去年の6年の担任、Y先生が立っている。見るからに、まじめそうだ。そう、この人は、私達のクラスの担にんの先生だ。去年のS先生に比べて、とてもまじめそうで、おちついた先生に見えた。

始業式に先生を発表された時、5－○のほとんどが、びくびくしているようだった。6－○六年生だから少なくしてくれるかな?）と思っていたものの、やっぱり思いどおり、宿題は多かった。こういう感じで4月7日は終わっていった…。

6－○になって3ヶ月。5年生の時のように、教室であばれている。そして、イジメも残っているようだ。でも、余り気にしていない。それに、グループ（かたまり）をつくっては、話をしている。6－○先生は、なんとなくたのしそうにない。

そして今。少し、イジメは残っているけど、大きな“仲間われ”はしていないし、6－○にいると落ちつく。そして、先生の出す、つらかった　宿題も、“くせ”がついたのか、つらくなくなった。

先生も、いつも楽しそうに笑っている。…が、体調不良になる時もある。ふりかえると、いろいろあったけど、時間の流れがはやい。

＜考察＞以上の児童の捉えた学級風景から、年度当初の4月から9月末当時の段階まで6学年・学級の様子が大まかに窺える。附小では当時、本来は、2年間の持ち上がり担任制になっていたが、教師の異動により、Y教師の場合、たまたま変則的に6学年学級を担任することになったという。これに対し、男子児童の観察による学級社会は、どのような生活世界を呈しているのか、つぎにみていくことにしたい。

＊＊

＜男子児童M1.＞

小学校最後の年、6年生を、5年生を一緒に過ごしたメンバー37人で卒業することになりました。5年生の時から影で続いていたいじめの話は、6年生の1学期に何度もやって話し合いをする度に少なくなっていきました。今ではクラスの全員が1つになった感じがします。このメンバーではじまった5年生の3学期間と比べてもすごく変わったと思います。

5年生の時は大きなけんかが何度かあって、クラスが2つ3つに分かれていたこともあってクラスが1つになるなんてありえないと思っていました。ぼくは6年生の1学期にあったいじめのメンバーに入っていて、いじめられている人の身にもならずしていました。今ではその友達とも仲良く登下校したり遊んだりしていていじめなんかしても意味のないものだし、逆に友達関係に傷がつくだけだと今では思います。

6年生の運動会では、応援ではみんな一生けん命応援していたり組み立て体操などでできなかったところやむずかしいところが成功することができました。

これからはぜったいにいじめや人がいやがることはやめるように心がけたいです。

＊＊

＜男子児童M2.＞

一学期の最初の日に、ひさしぶりにみんなにあいました。ぼくは、5年生のとき少しいじめられていたけど、みんなが少しやさしくなっていました。それから、ぼくがされていたいじめもほとんどなくなりました。だから、今までは、学校にくるのもいやだったけど、ぼくは学校にくるのが楽しくなってきました。それに5年生のときにくらべてF君が学校にきていました。　＜中略＞

6月には、K君が友達なんかいらないと言って（ので？）K君を仲間はずれにした。ぼくが5年生のときにあっさりと友達はいらないと言ったので、それにむかついて仲間はずれにしました。でも、今はふつうの友達にもどっているのでよかったと思います。

7月にキャンプがありました。O君とは、あんがい仲のいい、友達だったのでうれしかったです。

＜考察＞上記の男子児童の観察から見えてくる学級社会では、第5学年時から続いていたいじめ事象が減少しており、このことに児童が素直な喜びを抱いている。これに対し、女子児童の見地からは、いかなる学級社会と受け止められているのか、次にみていくことにする。

＊＊

＜女子児童F2.＞

私は、6年生になったばかりのころは、クラスの子や他のクラスの子にいじめられていました。1，2年のころは、友達も多くて、仲良くしていたけど、クラスがえをして3年生になってから6年生になるまでずっ～といじられてきました。だから何とか先生とみんなで話し合っても学年があがるごとにいじめられました。私がいじめられている中でもいちばんたいへんだった時がありました。おばあちゃんがおこってS先生に言ったそうです。

＜中略＞

でもそのあと6年でもいじめがあったことは、家の人には、あまりいいませんでした。それは、いじめられる私の方にもげんいんがあるからです。それは、いじめられてきたから、私も、かげで悪口をいったり、いじめてくる人にうそを言ったりしました。だからです。いじめられるからって悪口を言ったりにらんだりするのは、よくないとわかっててもなぜか言ったりしてしまいます。それで、そんな自分がいやで死にたいと思ったことがありました。でも6年生の1学期の半分くらいからいじめがなくなりました。それは、全部Y先生のおかげです。だから今は、みんなと仲良く学校生活をおくっています。　＜中略＞

そしてうんどうかいでは、みんなが組み立て体そうにせいこうしました。それから、100メートル走では、はじめて2位をとりました。走る前は、去年と同じ5位か6位だな～と思っていたので2位をとれた時は、すごくうれしかったです。2学期は、まだしゅう学りょこうやマラソンなどいろんなぎょうじがのこっているので、みんなで協力していきたいです。

＜考察＞6学年になる以前からいじめを受けているとするこの女子児童は、担任教師による働きかけのお蔭でいじめられることが少なくなったと述べている。

この点について、すでにみてきたように、学級内のいじめは、第5学年の時点以前から男女児童ともにあり、担任教師によれば、1学期半ばの5～6月ころ、教室前ベランダで泣いていた男子児童を目撃したことから発見したという。また女子児童の場合、いじめを受けている本人以外の女子児童からの訴えにより問題の解決に臨むことが出来たという。

学級内のいじめは、わが国では、最近も自殺者が続き深刻な問題となっている。子供たちは、一日の大半を教室内で実際に生活を営んでいるわけであるから、一般社会と同様に集団内でのいじめ事象は多かれ少なかれ発生するという事実に目を向ける必要がある。ところが、旧来教育現場での理想主義的規範意識は、ややもすると、いじめ事象を「あってはならない」出来事として隠蔽する傾向があった。

本研究が探究しようとする社会的見地からすれば、Y担任教師による児童への働きかけこそ、生きた道徳教育であり、学級内児童は、教師による「正義の提示」を望んでいるということが理解できる。また、学級に標準的な行動規範を提示するだけでなく、これを定着させるために、この児童たちが、現在小学校の最高学年であるとの自覚や構えを具体的な行事活動によって「身体化」させる働きかけが求められるだろう[11]。この点について、児童たちは、すでにこの行事活動について言及していたが、以下の記述では、とくに第1学年が入学してきたことによる係活動によって、第6学年としての責任感を自覚し始めた様子が示されている。

＊＊

＜男子児童 M3.＞

4月7日で6年生になり、小学校最後の年が始まった。そのときは、まだ、6年生の実感があまりなかったが、今では、いろいろな仕事を責任をもってしたりして、6年生という実感がわいてきた。

そして、今まではいじめがあり、集団でやっていた。仲間はずれをしたり、言葉の暴力で悪口やかげ口をしたりしていた。でも、Y先生が怒ったり、みんなで話し合ったりして、どんどん（いじめが）減っていき、被害をうける人もなくなっていき、みんなが学校を行けて、いやな思いをする人がいなくなった。

1年生の当番で、1年生はむちゃくちゃなこともするけど、6年生らしく、怒ったりして、1年生が、むちゃくちゃなことをすることが少なくなっていった。6年生になって、友達も増えたりして、外でよく遊んだりして、学校が楽しい。

校外学習の万博は、初めての万博で、すごく楽しかった。キャンプは、みんなではしゃいだりご飯をつくったりして、きちょうな体験ができてよかった。これからある、いろいろな行事も楽しみだ。最後に、どんどんいいクラスができあがっているのでいい。

＜考察＞以上の記述から、第6学年としての諸活動や行事により、児童たちは年少者への配慮や年長者としての責任をもって、物事を成し遂げること、これらの徳性を実際に学び取ろうとしていることが窺い知れる。さらに、自分たちの所属する学級が望ましい方向に成長していくことにより、学級の成員としての喜びが表明されており、このことが、道徳教育の基盤となる学級への愛着心を育て、帰属意識を培うものと考えられる。

(3) 授業日および授業内容の設定

平成18年1月に入り、第6学年・学級の授業最終期日を確認すると、3月から附属中学校への参観など、卒業に向けての行事活動が本格的に開始されるので、2月末が、授業の最終日程となることが判明した。そこで、この段階での教材内容を決定するために、附属小学校に出かけ担任教師と相談を重ねた。その結果、児童が中学への進学を眼前にしたこの時期に「大人になること」について、消極的な考え方をするものもいるとの教師による問題意識から題材が最終的に決定された。

そこで、具体的に提示する資料として、日頃の会話では必ずしも伝えられない保護者からわが子へのメッセージをこのインタヴューに託して伝えてもらう意図のもとに、授業は、2回に分けて試みることにした。第1回目はその準備作業として児童への動機づけための働きかけであり、それは資料1に示す手順で行った。

4．参与観察事例の考察

(1) H.18年2月9日（木）5時限（13：55～14：40）

題目：「子供の世界と大人の世界について考えよう」

＜題目設定の理由＞6学年・学級の児童が、新年度4月に中学校入学を控えたこの時期に、これから進学する中学校とそこで受ける授業や部活動、中学校の先生のこと、先輩たちのいる中学校生活を前に「大人になること」の節目の意味を考えさせるに相応しいと考えられた。

＜授業のねらいと手順＞まず、本日の授業では、「子供の世界からみた大人の世界」を中心にイメージさせる。この授業の後半では、再来週2月23日に「大人の世界からみた大人の世界」と「大人の世界からみた子供の世界」、さらに「大人になること」について考えるための、予告とそのための準備作業

について理解を図った。
＜準備したもの：児童用のワークシート（資料２参照。）掲示用としての「子供の世界」と「大人の世界」のイメージ図＞

＜資料２＞児童用ワークシート

学活：道徳授業「子供の世界と大人の世界」

平成18年２月９日（木）
５時限（13：55～14：40）
於、附小６年Ｃ組
名前＿＿＿＿＿＿＿＿

1. 子供の世界から大人の世界をみる。
2. ＜ひとが生きていく時間と空間＞人生。一生。

○誕生	○保育園・幼稚園	○小学校	○中学校	○高等学校	○大学	○就職
0歳		6～12歳	13～15歳	16～18歳	19～22歳	23歳～

○結婚	○職場の定年退職	○再就職			
○家族の誕生	○子供の成長・進学・就職	○老親の扶養・介護			
	○地域への貢献				○死
30歳	40歳	50歳	60歳	70歳	80歳～

3. あなたは、はやく大人になりたいですか。それとも今のまま子供でいたいですか？
それは、なぜだろうか？考えてみよう。まず、自分で考えてみよう。次に友達の意見を聞いて考えたり、質問したり意見をいいながら、考えてみよう。

4. 課題：身近な大人のひとたち、お家のお父さんやお母さん、親戚のおじいさんおばあさん、または親しい大人の方々、附小の先生に予約をとってインタビューをしてください。聞いた内容はメモをして、そのときあなたはどう感じたのかもう一度整理してから、来週の木曜までにＹ先生に提出してください。
＜質問内容＞下記の質問に加えて、あなた自身がとくにききたいこと⑤の質問をしてください。
① 大人の人から見た、大人の世界の苦労や喜びはなにか。
② 大人は、今の子供たちのことをどのようにみているのか。
③ 子供と大人の境目は何だろう？大人になるには、どうすればよいのか。
④ 仕事になぜつくのか、中学校や高校になぜいくのか、いままであまり考えなかったことを身近な大人の方に質問してください。
⑤ 自分で考えた質問（　　）
⑥ インタビューの感想・とくに心に残ったことについて。

(2) 上述の説明を児童に試みた後、下記の発問や追加の説明を行った。

(3)「みんなは、今どんな気持ちでいるのかな?まず自分自身やみんなのこと附小での６年間を振り返ってほしいと思います。早く中学生になりたい人、そうではなくまだこのままでいたい人。それは、なぜだろう。」
…予想をはずれて、児童の反応は、中学生に早くなりたいものがなりたくないものより多数を占めた。

（なりたくない児童は、37名中2名程度。）

(4)「つぎに、大人の世界と子供の世界を比べて考えてみよう。」
（下記の掲示物を黒板に貼り付ける。）

子供の世界	大人の世界

まず「一人で考えてみよう。」次に「グループでそれぞれ考えを出し合って考えてみよう。」
○子供のままで居たい人。それは、なぜだろうか。
○早く大人になりたい人。それは、なぜだろうか。
○自分と違う考えの人について、あなたはどのように思うのか。
○子供と大人との境目は、なんだろう?その違いはなんだろう?
○子供から大人の世界をみたらどのようにみえるのか?
○身近な大人のことを頭に浮かべてみよう。お家のお父さんやお母さん、親戚のおじさんやおばさん。同居していたりしていなかったりするおじいさんやおばあさんも、もちろん入ります。また、近所のひとや、街中でみかける大人たちもいます。

(5) ＜課題＞「次回の2月23日（木）に、この授業の続きを行います。そこで、皆さんは、お家に帰ったら、家族の中の大人、または親戚のひとや近所のひと、それから、附小の先生方にも、大人の方は皆さんお忙しいので必ず前もって時間を予約してインタビューしてください。」
①大人の人から見た、大人の世界の苦労や喜びはなにか。 ②大人は、今の子供たちのことをどのようにみているのか。③大人になるには、どうすればよいのか。④仕事につくこと、学校になぜいくのか、いままであまり考えなかったことを身近な大人の方たちに質問してください。⑤聞く前に、自分は何を聞きたいのか、○印の内容とあなた自身がとくにききたいことを加えて質問してください。⑥聞いた内容は、メモをして、⑦そのときあなたはどう感じたのかもう一度整理してから、⑧来週の木曜までにＹ先生に提出してください。⑨次回2月23日の授業のときに、皆さんがどんなことを大人の人からきいて、どんなことを感じたのかについて、できれば前もって知っておきたいからです。

(6) H.18年2月23日（木）5時限（13：55～14：40）
回収された前回の課題は、下記の通り整理することができた。

（前回までのまとめ）

1. 子供の世界から大人の世界をみる。

○とってもいそがしそうで、せかせかしてて、息がつまりそう。気分転かんができない。自分で働いて生活していかないといけない。
○時間に厳しそう。息苦しい感じがする。趣味と仕事の時間を分けて楽しむときをつくっている。
○仕事や金銭問題、介護など色々大変な事が多いので、けっこうつらい世界だと思う。
○大人になるとけっこう大変な世界だと思う。

2. あなたは、はやく大人になりたいですか。それとも子供でいたいですか？
それは、なぜだろうか？まず自分で、次に友達の意見を聞いて考えてみよう。

○子供のままが良い。
<理由>無責任で良いし、子供の時にいろんな事をしたいから。
<理由>大人は、仕事もあるし、子供のお世話もある。子供は、必要なもの、お金全て大人にしてもらえるし、買ってもらえる。子供は、自由!!そして、夢がある!!大人は夢が叶い終わるとき。
<理由>1番で答えたような、大変な事が多いから。
<理由>子供の時にしかできないようなことができるから。
○早く大人になりたい。
<理由>大人の社会は、どんなのか興味があるから。(厳しいか。)将来の夢があるから。
<理由>早く就職(ゲームプログラマーかもしれない。)してお金をもらいたいから。
後、車(できれば、)ポルシェに乗りたい。
<理由>はやく大人になりたい。でも、やりたいことはやってから。
<理由>子供(ども)をフルに使(つか)って遊んで大人になりたい。
<理由>これからは、勉強や仕事などで大変だけど、いろんな、新しい事を学んだりできるし、結婚できたら、自分の子供もできて、うれしい事もあるから。
○早く1大人になりたいけど、2子どものままがいい。
<理由1>自動車を運転したい。大変になりそう。
<理由2>今みたいにあそびたい。あまりいいことじゃないけど、苦労しないであそびたい。一番体力がピークで、一番楽しめる。
<理由1>自転車を運転したい。<理由2>遊ぶ時間がへるような感じました。
<理由>遊びきってからなら大人になりたい。

図1. 導入:「子供の世界」と「大人の世界」についての話

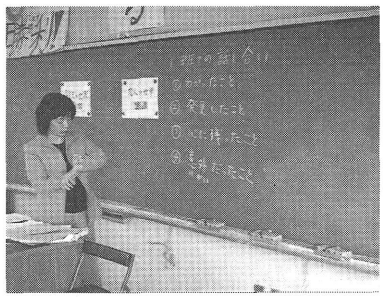
図2. 班活動の留意点(板書)

図3. 4人の班づくり

3. 課題:身近な大人のひとたち、お家のお父さんやお母さん、親戚のおじいさん、おばあさん、または親しい大人の方々、附小の先生に予約をとってインタビューをしよう。

<インタビューで話してくださった方>お母さん、お父さん、近所のお母さん、附小の先生他
①大人の人から見た、大人の世界の苦労や喜びはなにか。
○小公女セーラのようなくろうはしていない。喜びは、子どもが生まれた。(お父さん)専業主婦なので働いた分だけみとめてもらえない。喜びは、みんな(家族)がぶじに帰って来てくれて、ご飯を食べてくれること。←これで、苦労が消える。らしい(お母さん)♪(運命)。ジャジャジャジャーン×2
○苦労…仕事が大変な事。　喜び…仕事が成功した時。
○苦労→人間関係。仕事上や近所付き合い等。喜び→仕事がうまくいったとき。子供の誕生、成長。
○苦労…勤労の義務。育児、親の介護、家事全般。喜び…仕事のやりがいや達成感、子育ての喜び、勤労より得た報酬での買い物や旅行。
○苦労…私達を育てるために働かないといけない。喜び…自分で考えて生活できる。
○苦労は、学校の勉強のように計算通りの答えにならない仕事が多い。喜びは、仕事をやりとげたときの達成感。
○苦労→人の気持ちを読みきれない。喜び→子供の成長。

○苦労は特にない。　喜びは子供の成長。
○＜苦労＞いやだと言っても止めたり休んだりすることのできない仕事。自分のすることに責任をもたなければいけない。子供の育成も見守らなければいけない。
＜喜び＞家族のみんなが笑っている時。健康でいられる。
○お金をかせいでそれでつかうこと
○人の苦労や喜びは、個人によってちがうものだから、大人のしゃかいでいう一ぱん的なくくり方で答えるようにできるものではない。苦労や喜びは大人だから、子供だからといって決まるのではなく、それぞれの個人的な価値感によってさだまるものです。だから答えられません。
○＜苦労＞自分の思ったように物事が進まないこと、と仕事に時間を取られて、自分の時間が少ない。と、家庭を守っていくのは大変だ。

大人は、今の子供たちのことをどのようにみているのだろうか。

○みんな良い子（母）
○生意気。（昔の子供は素直だった）（今の子供は親の言う事を聞かない）
受験勉強が大変。
○自分たちが子供の頃は、もっと外で遊んでいた。今のように治安が悪くなく、暗くなるまで遊んでいても心配なかった。勉強や塾に通う子は少なく、学校の宿題だけで将来の不安はあまりなかった。そのようなことを考えると、今の子供はかわいそう。
○勉強の量が減っているから心配。ませている。お母さん達が子供のころと全然ちがってびっくり。私達の話を聞いているとおもしろい。
○うらやましい
○ゲームばかりで遊んで、遊びに創造性がない。
○お金の使い方が悪い。母や父たちが子供のころは、そんなにお金をつかわなかった。
○豊かすぎ。ぜいたくすぎ。
○恵まれた世の中の子。けれど勉強の面ではかわいそう。
物欲
○「めぐまれているなあ」
○自分の子供の頃と比べると、遊ぶ時間がなくかわいそうな事。
○大人の教育力がなっていない感じがする。しつけの行きとどいていない子供が多い。大人をうやまう気持ちが少ない。

図４．班での話し合い

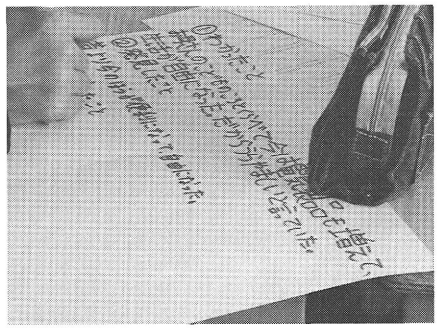

図５．「大人になること」への発見は？

子供と大人の境目は何だろう？大人になるには、どうすればよいのか。

○子供…自立するまで　　大人…誰かを守れる人
○自分の責任が取れるという事が大人。
○境目　社会的に責任を持たないといけないのが大人。この反対が子供。
どうすればよいのか。常識を身につける。精神面で成長すること。とにかく勉強する。

○境目…働いて収入を得ることで、大人になると思う。
大人になるには、…自分の行動に責任を持てる人になること。社会のルールを守り、社会の一員として、責任を果たす人。
○自分の生活に責任を感じる時
○境目→自分でかせぐこと。自分の責任をとれること。
○年れいと自分自身の行動に対する責任
○法律的には、20才以上。
○自分の言動に責任を持つ。働き出すまで。
○18才後半ごろ。大人になるにわ…よくわからない
○成人式をむかえてから。20才（数字で言えば）親になるとき（お母さん）20才以上で就業についたとき（お父さん）
○相手の心の痛みがわかって、相手に対して思いやる心が生まれ、思いやる態度が本当の大人

仕事になぜつくのか、中学校や高校になぜいくのか。

○お金をもうけるため、勉強するため。
○仕事を通して社会との関わりを持ち、自分の社会性を育てるため、収入を得て、生活を安定させるため。（学校は）、集団生活の中で自分の社会性を育てるため。学習によって忍耐力や協調性をやしなう
○人生にくいがないようにするため。あとあとくろうするからなど。
○自立した時に自分で生活するために、仕事につかないと生活していけないから、そのために勉強して、がんばって働く。
○仕事は自分のやりたいことがやりたいと思うから。中学や高校は、勉強したいことがあったから。友達をたくさん持ちたいと思ったから
○仕事は生活がかかっているから。自分自身の精神を高めるため。中学校や高校には自分の理想とする姿へのステップ。
○仕事につく、中学や高校へ行くのは、「いい大人」になるため。
○仕事につくため→夢や希望を実現する'しゅだん'として、仕事につく。
なぜ学校に行くのか？→自分の可能とか、特性、個性を探すためにいく。
○（1）人の役に立つため（2）自分を（みつめて、みつけて、みがく）ため（お母）
人生の基礎をつくるため（父）
○仕事は生きるため。家族のため。豊かな生活をするため。中学校、高校は大学進学のため。専門的な知識を身につけるため。常識を身につけるため。人間的に成長するため。
（仕事・学校の）両方は、自分の夢や目標を実現させるため。
○仕事につくのはなぜか…社会の一員として役割を担うことは、義務でもあり喜びでもあるから。人間として一番不幸なことは、仕事が無いこと。自分が社会から必要とされていない事だと思う。中学校や高校になぜいくのか。…おじいさんやおばあさんの頃は、小学校を出て働く人もたくさんいた。でも立派な社会人として今日の日本を築いてこられた。ただ、現代の世界は資源の枯渇や、環境問題、貧富の格差など多大な問題を抱えています。先進国としての日本としての責任は、世界の人々が皆幸せに平和に暮らす為にたくさんの知恵を出し合って、よりよい世界にする役割がある。その為にも中学、高校、大学でたくさんの知識を得て、環境問題や資源の問題を解決していく必要があると思う。

自分で考えた質問

＜今まで進学してきた学校で満足しているのか？＞よく大人になってから、もっと勉強しておけばよかったと思う。
＜　　？　　＞子供のままでいたい。いろんな可能性をためせるから。
＜子供の間しかできないことは??＞勉強（義務教育）責任を考えずに行動する
＜大人ができないこと。＞特にない？我がままを通すこと

Q<子供にもどりたいと思ったことはあるか>A 子供にもどって、もう一度勉強をもっとしっかりしてみたら、また人生がちがったかもしれないから。
<大人の生きがいは何なのか。>子供が素直に育ってほしい。子供のために働く。
<宝物は?>家族（まま）えりさとなりさ（パパ）自分（なあちょ）

インタビューの感想・とくに心に残ったことについて。

○大人はいいなあと思った。それは人生の成功者が多いから。
○みんながいつまでも子供の心を忘れないでほしい。
○やっぱり、子供のままがいい。大人は苦労がありそう。でも、私は、ずっといられる歳なら、高校生ぐらいがいいかな〜。
○クラスの中の班で話すだけでは出てこないような答えがいくつかあった。
○大人の人の仕事での苦労や喜びなどがよくわかった。
○大人になれば今のような楽な暮らしはしていけないという厳しい事がわかった。大人はとっても大変（仕事、子育て、家事）ということが心に一番残った。
○今までは、大人になるのが大変だからイヤだとおもっていたけれど、このインタビューで、早く大人になりたいと思った。自分のやる事に責任を担うことができるように、これから頑張っていきたい。
○今の大人の人に比べて、今の子どもは自由。お母さん達が子供の時は、そんなに電気製品もなく、自由ではなかった。それに比べて、今の子供は、自由でいい。習い事もして…。自由になった分わがままになったり、好き勝手しすぎる所もある。
これこそ自由 ←→ 責任。自由にする分、ちゃんと勉強して、自立して、立派な大人になりたいです。
○うちは、話し方、ご飯の食べ方、はしの持ち方などを始め、人の気持ちや関わり方など、普段の生活の中で色々話をしてきます。僕はなぜ色々言うのかと思っていたけど、今回、この課題が出て親から意見を聞き、その理由がわかりました。親には分かっているから、僕に教えてくれているんだと思った。
見た目は、今からなる中学生でも大人に見えるけど、しっかりした中身がないと「大人」とは言えない。だから、ぼくは、立派な大人になれるために、知識はもちろんだけど、心も大人になれる様に努力していきたいと思う。 －終了－
○なぞがよけいにわからなくなった。
○お母さんは子供を生きがいと言ってくれてうれしかった。
○子供の世界と大人の世界？というのは難しいことだと思った。もう一度、大人になりたいか、考えてみようと思った。

5．結論

以上の通り、授業実施に至る経緯を含む全場面を参与観察の過程とみなして考察を加えてきた。第5学年以前から続いていたという学級社会内のいじめは、どちらかといえば、昨今社会問題となっている陰湿ないじめではなく、教師にとって比較的に可視的ないじめの性質を帯びていた。この点からすると、児童たちは、第6学年・学級内で、担任教師による道徳的判断基準の提示を受けて、学級社会内の人間関係の困難さを克服しながら、子供から大人への階段を徐々に昇りつつあることが窺えた。

当初の予定では、道徳授業の内容を「友達とのけんかやいじめを手がかりに、仲間づくりや友達とのつきあい方について考える」題材を構想していた。ところが、既に述べた事情から、また担任教師による提案もあり、小学校を卒業し中学校への入学を直前に控えた第6学年の児童にとって、「大人になること」の意味を考えることは、今後の方向性を見出すためにも、切実で適切な題材と思われた。

なぜなら、資料1における、彼らの記述にも見られたように、第6学年4月の段階で既に最高学年としての責任感を意識せざるを得ない新入生への活動場面に遭遇して、学級の児童たちは最高学年にふさ

わしい振る舞い方や立場を十分に認識し努力を傾けようとする緊張感と不安の中にいることが十分に理解できたからである。

ところで、2回にわたる授業の試みにより写真および資料2〜3にみるように、児童たちは保護者や大人から聞き取ってきた資料を基に班別討論を試みて児童相互に「大人になること」についての積極的な意味を初回の授業より掘り下げられるようになったことがわかる。

以上の参与観察事例から、道徳授業の試みは、決して単発で終了できるものではなく、少なくとも半期から可能ならば年間をとおして、単元など設定されたテーマを手がかりに、当該担任教師との協働作業を継続し、学級内児童の生活全体を視野に入れることにこそ、本来の道徳教育の目的が達成されるものであることを肝に銘じなければならない。

＜注＞

(1) 平成16〜17年度学部長裁量経費を基盤に関わってきた「教育実習指導のあり方」研究会を母胎に連携を推進してきた。教育実習指導のあり方研究会（代表、蓮尾直美）平成17年度学部長裁量経費研究「教育実習指導のあり方」に関する総合的研究（II）」平成18年3月刊参照。

(2) 平成17年11月開催の、附属中学校公開授業研究会では、教科授業と関わらせた附属中教員による道徳教育が取り組まれている。

(3) 毎日新聞（H. 18. 11. 4付）報道によれば、近年、いじめによる自殺者は、ゼロとの文科省見解が発表されてきた。ところが、この間16件の自殺と推測できる事例が新たに発見されたという。

(4) 米国の社会学者 P. W. Jackson により初めて用いられた概念。なるべく痛手を受けないで学級生活を送るために、生徒が学校生活で学ばなければならない報酬体系。“Life in Classrooms” Holt, Rinehart and Winston 1968 pp33-37。

(5) E. デュルケム著「道徳教育論1」麻生誠、山村健共訳　明治図書　昭和39年　160〜161頁。

(6) 平成18年12月改正。

(7) 教室の壇上・黒板の上に掲げられている学級訓「みる」（図3参照）に込められた意味は、理科観察の構えに通ずるばかりでなく、友達を見守るなど、担任教師の保持する教育方針を象徴するものといえる。

(8) 男性教師、30歳代半ば、教職経験10年、本校赴任2年目。専門科目は、数学教育。大学院修士課程修了。附小では、H. 18度からの担任制は、1カ年に変更された。

(9) 前掲冊子、（平成17年度学部長裁量経費研究）36〜37頁。

(10) E. デュルケム著「道徳教育論2」127〜136頁。

(11) 平成18年度卒論において試みた中学生対象の調査結果から、この事実が明らかになった。
井戸田優美「大人の世界と子供の世界の関係性－大人の空間が子供の他者尊重の精神と客観性を育む－」
野々垣全晋「性差否定が子供に与える影響－アイデンティティ形成への作用を中心に－」参照。

＜付記＞附属小学校における授業実施の機会を与えていただいた第6学年学級担任のY先生、ならびに、級友の行いに自発的に拍手でエールを送る学級の子供たちに、心から謝意を表します。